

1 人生の流れ

21歳の時、就職した銀行を1年で辞めた私は、憧れていたモデルの世界に飛び込みました。

高校時代からいつも気になって見ていたモデル募集の雑誌記事。大学時代にも、バイト先の友達から「どうしてモデルしないの？」と言われた記憶がありますが、その時には「そんなことできるわけない」と夢を封印していました。自信がなく行動できないまま、年月を重ねていきましたが、銀行で挫折し仕事がなくなった私は、思い切ってモデル事務所の扉をたたくことにしました。

「どんな場所だろう？ 私なんかを受け入れてもらえるのだろうか？」と不安でした。でも、他に行きたいところもなかったのです。

モデルの世界には、華やかで背が高く、細い女性たちがたくさんいました。美しく細い首の方、

メイク前のリンパマッサージを欠かさない方、常に手袋をはめている「手のモデル」の方……初めて目にするプロの方たちの様子に、自分の姿がひどいことに気づかされます。

父とそっくりな猫背、だらしのない足元、O脚で内股、手入れをしていない肌……。着ている洋服は、似合うか似合わないかも考えずに安く可愛いからと買った物でした。事務所の方からは靴の汚れを最初に指摘されましたが、それを恥ずかしく思う美意識さえ持っていなかったのです。

レッスンでの先輩たちのファッションを参考にしてみたり、初めて10cmヒールを買ったりと真似することから始めましたが、ハイヒールで立つて歩くこともままならず、カメラの前に立つても足と手がバラバラなポーズ、笑顔は引きつっていました。あるオーディションで先輩モデルと2人で歩かされた時も、遅れてついていけず、情けなさでいっぱいになりました。

ある時、鏡張りのレッスンスタジオでは身長が176cmあるモデルの先輩が、ハイヒールで颯爽と歩いていました。その姿はため息がでるくらい美しく、「私も綺麗になりたい!」と心の底から思いました。それが人生で初めての『美への目覚め』の瞬間でした。

私は163cmとモデルとしては背が低いので、大きなショーには出られません。それでも1年間必死でウオーキングレッスンに通いました。

「背が低い小さな私が、どうしたら大きく見えるのか？」

「形が綺麗でない手や足をどう動かしたら大人っぽく上品に見えるのか？」

そればかりを考えてレッスンをしていました。

最初にいただいた仕事は、百貨店の新聞一面広告でした。マリオネットの役で、ピエロの姿で操り人形のようなポーズを要求されました。どうしていいかわからない私は、まったくポーズが決まりません。あきれたカメラマンに「しかたない。ジャンプして！」と言われ、何度もジャンプしてみせることでなんとか撮影を終えました。要求されたことを表現するのがこんなに難しいことなのかと、うまくできなかつた自分に落ち込みました。

それからは、ただ毎回目の前の仕事に一生懸命打ち込みました。

時代はバブル。器用ではありませんでしたが、愛想だけは良いということもあって、私のお仕事は少しずつ増えていきました。大きな舞台やコレクションのショーにはなかなか出られませんでしたが、ブライダルショーや百貨店のフロアショーには出させていただくようになりました。けなされたり、称賛されたり、真冬に海での撮影で辛かったり、美味しい物を食べたり、高価なアクセサリーをつけたり、毛皮を着たり……と、たくさんの経験をさせていただき、あっという間に6年が過ぎました。

私は、結婚を機にモデルのお仕事を辞め、専業主婦になりました。

しかし10年後、私は、2人の子どもを抱えて離婚することになってしまいました。

本格的な社会復帰が必要になりましたが、実は離婚前から、「自分にしかできない仕事を創りたい」と思い、動き出している時でもあったのです。

けれども、専業主婦がいきなり起業をめざしたわけですから、パソコンは使えない・企画書も作れない・契約書なんか見たこともない……そんな状態からの始まり。周りからは「できるわけない」と言われながらの、無謀な出発でした。

たくさんの方に迷惑をかけましたが、協力もしていただき、このとき私は「人生は繋がっている」と強く感じたのでした。

2

スクールの中身ができるまで

私は、離婚する半年前からウエディングプランナーになりたくて、養成講座に通っていました。そこで、昔から知っていたメイクの先生と再会しました。そのスクールに教えに来ていた、パー

ソナルカラーの先生とも知り合いになっていました。

ただ、その頃ウエディングプランナーの求人はずいぶん20代が主流。子どもが小さい私は、土日と夜がメインとなるブライダルの世界には入れません。

悩んだ私は、自分がなぜウエディングプランナーになりたかったのかを考えてみました。

ブライダルショーにたくさん出ていた私は、花嫁にドレスで綺麗に歩く方法を教えられると思ったからでした。そこで気づいたのです。「綺麗に歩きたいのは花嫁だけじゃない!」と。「それを若い女性たちに教えればいいんだ!」と考え、『ブラッシュアップスクール』の立ち上げを思いついたのです。

そんな時、たまたま道端で176cmある憧れのモデルの先輩と、15年ぶりに再会するのです。もう運命としか言いようがありませんでした。

スクールには私がモデル時代に経験した、女性を磨くノウハウを全部詰め込みました。

印象を磨く立ち居振る舞い、美しいウォーキング、個性を活かすメイクアップ、似合う色合いを知るパーソナルカラー、正しい言葉遣い、食事のマナー、自分を癒すアロマテラピー、夢を叶

えるコーチング、心の状態を知るアートセラピーなどなど。外見と内面の両方から女性たちを輝かせる内容にしました。

それまでに知り合っていた方々、メイクやパーソナルカラーの先生、モデルの先輩などに先生として参加していただき、実現できたことでした。

スクールの名前は『アル・レスカ』に決めました。魚座の星の名前で「結び目」という意味があります。

講座を組み合わせるときに気をつけたのは、先生たちにコンセプトを明確に伝えることでした。

「少人数制で一人一人の魅力を引き出してほしい」

「知識やスキルよりもその人の美しさを引き出すことだけを伝えてほしい」

と、お願いしたのです。

その頃のフィニッシングマナースクールでは、行けばこのようになるという目標がありました。それは、「みんな巻き髪にワンピースとハイヒールになる」「みんなセレブのようになる」というイメージ。私はそれに対して、それぞれの個性を引き出すことや、みんな同じではなく一人一人違う魅力を持つことが大切だと考えたのです。

今でもこのコンセプトは変わっていません。

3

スクールの開校まで

スクールの内容は決まりましたが、それを開校させることの方が大変でした。

場所は、占い師に言われた「船のような建物で水があるところ」にピッタリな、福岡の高級ホテルにしたいなと思いましたが、「始まってもないスクールに貸してはくれませんよ」と言われてしまいます。

しかしまた、ここでも運命の光が差し込みます。

その高級ホテルは私がかつて働いていた銀行の系列ホテルだったのですが、私を銀行に推薦してくれた方が出向でたまたまそのホテルの部長に就任していたのです。もう20年前のことですから、覚えてないだろうと思いつつ、銀行時代のツテをたどって会いに行きました。

「女性のためのスクールをやりたいです。結婚前の女性たちが足を運ぶことによって、ホテルの挙式に繋げるためのアピールになるのではないのでしょうか」と、自分の思いと相手のメリットを

訴えました。

そうして、ようやくスクールを開校してよいと許可をいただきました。

それから自分で体験会のチラシを撒き始めましたが、どんなに配っても反応はゼロ。

どうしたらいいのかわからなくなって、チラシを格安で作ってくれた広告代理店の友人に、「生徒さんが集まらない。無理かもしれない」と、泣き言をもらいました。

その友人からは「諦めるようなことを言って……お前に協力した人たちはどうなる？」と、叱られてしまいました。その愛のある言葉に、「最後まで諦めずやってみよう」と思い直したのです。

それからは、相談した知り合いのイベント会社が、駅前で女性たちに手渡しでチラシを配ってくれました。手渡しのチラシは、とても効果的でした。さらに、元広告マンの友人が文章を考え、フリーペーパーへの広告も出しました。

本当に多くの人の協力があつて、体験会に大勢の人が集まってくれたのです。

それでも、体験会の1日目は散々でした。誰からもスクールへの申し込みはありませんでした。

人前でプレゼンしたのは初めてでしたから、当たり前かもしれませんがね。

体験会2日目には作戦を変えようと考え、「私がやっていいことならこのスクールをやらせてください」と神に祈りました。正直、なんと言ったのか覚えていません。「スクールに入れば、みなさんこうなれます」ということを5つお話しし、「今、お申し込みただけなら10% off します」と最後に付け加えました。

すると、一人の女性がその場で申込書を書いてくれました。それに続くように、何人もの方が申込書を書いてくれたのです。

体験会が終わった後、「うそみたい！ 最高！」と、叫びたい気分でした。

こうして、『アル・レスカ』のスクール1期目は、8人でスタートしました。

スクールは半年間で、各専門家の先生方に協力いただいで1期目は無事に終わりました。

2期目はたった4人でしたが、開講も決まっていました。

私は「1期目を受講した生徒さんはどうだったのだろう？」「本当に期待に添えたのかな？」と、不安に思っていました。最後のレッスンを終わり、お茶をして帰る時でした。

ある一人の生徒さんが私の手を握って、「先生ありがとう！ 本当に良かった。こんなに意識が

変わるとは思ってなかった」と言ってくれたのです。彼女の嬉しそうな笑顔を、今でもはつきりと覚えています。

この言葉に感激し、彼女の褒め言葉に後押しされてスクールを続ける決意をしました。

3年ぐらいは生徒さんを集めるのが本当に大変でしたが、徐々に楽になり、様々な企業から「スクールのような研修をしてほしい」という要望が来るようになり、マナー講師の道も歩むことになりました。

それから16年が経ち、多くの女性たちの隠れた美しさを引き出してきました。

女性は、磨けば誰でも美しくなります。高価な物を持つより、若くあることより、その方らしく魅力的であることが一番大切です。魅力的な女性とは、身体も心も美しく輝き、表情豊かで、何より自分自身を受け入れ、自分にも人にも優しく前向きに行動できる人です。

◇理系の引きこもり大学院生

彼女は、就職率が良いからと勧められて進学した理系の大学で、就職活動に失敗。

仕方なく大学院に進んだものの、大学に行けなくなって家にいる毎日でした。

そんな時、お母さんから「良い靴を履くと良い所へ連れて行ってくれるから」と、素敵なお靴を買ってもらいます。「この靴を履いて、綺麗に歩かなくちゃね」と言われ、ウオーキングレッズンを受けに來られました。上手になるに伴って表情が明るくなり、スタイルも良くなりました。

やがて、ウオーキングインストラクターの資格を取得して、今度は自分が友達にウオーキングを教えるようになりました。

モデルにも挑戦し、彼女は綺麗でいることが当たり前になっていきました。

大学時代の写真を見せてもらうと、別人のようだったのを覚えています。

そんな時、町でカメラマンに「綺麗に歩いていますね」と声をかけられ、その場で写真を撮ってもらうということがありました。後に、そのカメラマンから知り合いの建築デザイナーを紹介され、そのデザイン事務所にインターンシップに行くことが決まったのです。

彼女の初仕事は、ファッションビル的女性向けのイベントでした。あんなに欲しかった内定を、彼女は綺麗に歩くことで手に入れることができたのです。

◇東京のアナウンサーを目指した地方女子大生

彼女は、大学時代からアナウンサーを目指してアナウンスレッスンを重ねていました。

3年生の就活で東京の放送局を受けに行きますが、地方の女子大生なんか相手にしてもらえません。次の年は、前年の挫折感から東京に就活に行くことができず、ミスコンテストにチャレンジすることに。そうして、スクールにレッスンに来られました。

話し方はできるので、ウォーキングと振る舞い、メイクとオーディションでの意識を磨けばよかったです。コンテストでは、トントントン拍子に最終審査まで進みました。残念ながらもランプリはとれませんでした。自信をもって就活を再スタート。就職したのはNHKの地方局でした。けれど、それからさらにミラクルが続きます。地方で大人気のアナウンサーになり、数年後、東京のアナウンサーになるという夢を叶えることができたのです。

◇否定的な自分を変えて幸せな結婚

彼女はいつも自分を否定して、人生がなかなかうまくいきませんでした。スクールの仲間から「全部そのままのあなたでいい」と受け入れてもらい、とても明るくなりました。

講座の最後にプロのカメラマンに写真を撮ってもらおうのですが、彼女はまるで雑誌の1ページのように堂々と素敵な自分を表現していました。彼女のオーラはキラキラとしていましたから、それに素敵な相手が引き付けられたのでしょうか。半年後には結婚が決まっていました。

彼女は「スクールでみんなから自分を受け入れてもらって、このままの自分で良いのだと思えました。それから前向きに変わりました」と言ってくれました。

たくさんの生徒さんたちとの出会いを経て、私は2017年に魅力アップアドバイザーを養成する協会を設立しました。スクールの魅力アップスキルをオリジナルメソッドにして、人の魅力を引き出すプロを育て、日本中に広げていきたいと考えたのです。

スクールを卒業して何年も経った生徒さんたちも「今度は教える立場になりたい」と、私のやりたいことに共感し、集まってくれました。今では地域でウォーキングレッスンを開催したり、企

業でマナー研修をしたりと活躍してくれています。

協会のコンテンツとして、女性たちの夢を叶えるためにパリで絵画のような写真を撮る『フォトジェンヌin Paris』を開催しています。パリの有名雑誌のヘアメイク担当からメイクをしてもらい、パリコレクションの衣装を着て、世界を飛び回るカメラマンとパリの街角で撮影するのです。表紙の写真がそうですが、本当に夢のような体験でした。フランスではアパートメントで生活をし、朝からフランスパンを買いに行くという生活をします。

パリで見かけた女性たちは姿勢が良く、颯爽と歩いています。特にご年配のマダムたちは、本当に華やかなファッションに身を包み、女性であることを楽しんでます。

本書には、パリの女性たちのように魅力的に輝くために、また、一生無くならない3つの美しさ——「行動の美しさ」「言葉の美しさ」「心の美しさ」を身に付けるために、日々の美意識の磨き方と私がスクールで女性たちにお伝えしてきたことを詰め込みました。